

【体・心・霊】

ここで、物事の考え方の根幹である《体・心・霊》について記述します。

それぞれには明確な定義があり、それぞれが担っている役割があります。そして、クライアントの抱える問題や課題と向き合う上で、それがどの分野のモノなのかを見定めることはとても重要です。脳大成理論や研究会で表現される様々なことも、それぞれどの視点から表現しているのかが分かることで、理解はより深まります。

しかし、視点がずれてしまっていたとしたらどれだけ話していても伝わる事はありません。現に、わたし達は日常生活でこのようなことが実に多いのです。『共有』ということ深く考えていく時に意識しておきたいポイントです。

例えば、美術品を見ている三人の人がいたとします。三人が三人とも、その美術品を見て、「わー、素晴らしい！」と言っていたとします。

一人目は、その美術品から伝わってくる芸術性に感動して、「わー、素晴らしい！」と言っています。

二人目は、その美術品が創作された歴史的背景を理解していて、その歴史的背景から、時代背景から見た作品の新奇性に感動して、「わー、素晴らしい！」と言っています。

三人目は、その美術品の価格と将来に上がるだろう価値を捉えて、「わー、素晴らしい！」と言っています。

「素晴らしい！」という言葉においては一緒ですが、三人が捉えていることは全く違います。これはあくまで例えばの話ですが、こうやって何となく成立しているように見えるような曖昧さの中で実際にわたし達は生きているのです。

実際に「あなたという人はどんな人ですか？」と聞かれて、あなたを知る人は全て同じように答えるでしょうか？その人それぞれの切り取る場所によって表現は変わるでしょう。

《体・心・霊》という考え方は極めて根幹かつ重要であり、もし捉え方が曖昧だったとしたら、何度聞いても何度触れても掴むことはできません。上記の美術品のような相違が生まれないためにも、ここで、脳大成理論で定義する《体・心・霊》を説明したいと思います。まずそもそも、こういった事を意図的に学習しようとしなない方は、わたし達はココロとカラダでできていると思っている人でしょう。《体・心・霊》とは、言葉としては聞いた事があったり、知っていたりするのですが、限りなく生活や哲学には組み込まれていないと断言できます。

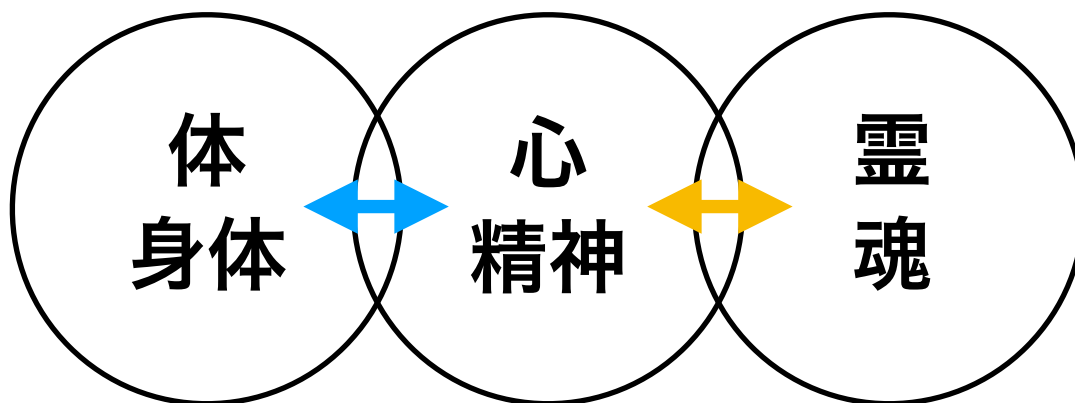
物事には大別して、唯物論と唯心論と、いずれも一元論ですが、2つの考え方があると言えます。臓器の1つである脳がココロを創り出している、健康でなければ意味がない、などの考え方は、つまりは『唯物論』と言えます。唯物論とは、観念や精神、心などの根底には物質や目に見える現象があると考え、それを重視する考え方です。「世の中は結局お金だよ。」といった考えや「結果が出せなければ意味がない。」などの考え方は唯物論的であると言えます。

## 脳大成理論 1-30

もう一つが、カラダを含め、この世界はココロが創り出したものだ。現実世界はココロの投影だ。という考え方は唯心論であると言えます。唯心論とは、人間・社会において、心、もしくはその働きこそ至上の要因であるとし、またそれを重視する考え方です。

しかし実際には《体・心・霊》という3つでわたし達は存在しているという考え方が古くから主流となる考えでした。《体・心・霊》という表現が分かりにくいのであれば、《身体・精神・魂》と言い換えることもできます。

脳大成理論では  
ここを「脳」と定義する。



おおざっぱな記述ではありますが、歴史をたどると、869年キリスト公会議において、人間は身体と心の存在であるという事にしよう方針を定めました。霊があるのは教会であり、神であると定めたのです。おそらくその決定には、政治的な働きかけがあったのでしょう。そこから、人間はココロとカラダでできているという考え方が拡がっていったと言えます。

偉大な哲学者であるプラトンは靈魂を「プシュケー (Psyche)」と表現しており、これは古代ギリシアの言葉で「息・呼吸」を差し、そこから発展して「生きること」や「霊、魂、心」を意味するようになった言葉です。さらに、psycho、psychicなどはPsycheが語源となっています。しかし、プラトンの言っているプシュケーは、明らかに《体・心・霊》で言うところの『霊』を差しています。

このように様々なところでこれらの言葉が登場しますが、脳大成理論で言葉として定義するところの《体・心・霊》における、霊がココロと表現されていたり、逆にココロを魂と表現していたりと混在してしまっているので、特にココロと霊、精神と魂の違いが実に曖昧なのです。

他の例で示すと、日本ではココロの病を精神疾患と呼びますが、ここで言う精神はココロと同意語です。では、精神疾患とは、ここでいうココロのことを差しているのかというところが違いますね。あくまで、精神疾患は最終的にカラダの問題であると捉えるからこそ、治療法が向精神薬の処方となるのです。医学が説いているのは、あくまでカラダの事に留まります。ココロが病むと「カラダ」に影響があるという考え方です。

## 脳大成理論 1-30

そして、心理学が説いているのは「ココロ」のことであり、霊のことではありません。ゆえに、心理学は、霊性という視点を全く度外視して人のココロを論じています。フロイトは、ココロから全ての問題が始まると考え、それが斬新だったのですが、しかしやはり霊性のことは取り入れていませんでした。さてこれでは不十分であるという事から、霊性という視点を組み込んで人を哲学的に考察しようという試みが心霊主義（スピリチュアリズム）なのです。

本手引きでも、偏ったスピリチュアリズムなどという表現を一部していますが、それは否定、批判しているのではなく、あくまで人は《体・心・霊》の3つの要素でできているのであって、この3つの視点から有機複合的に捉えていかなければ、それは偏っていると主張しているに過ぎません。

カラダの問題を担うのが医者なら、ココロの問題を担うのが、カウンセラーでしょう。さて、前述の通り、ココロ・霊・精神・魂、これが混在して人それぞれに表現されてしまっているのが、定義が実に曖昧です。ですが、ここでそれぞれの定義をしっかりと理解しておけば、「ここで言う魂とはココロの事を言っているな。」「この人は、霊とココロを混在して話しているな。」と明確に分類して理解することができるようになります。

多くのスピリチュアル講師やセラピスト、ヒーラー、自己啓発・成功哲学の講師はこれらを明確に理解していないように思います。現代では、人はココロとカラダの2つでできているという考え方が主流です。魂や霊という言葉を使って、結局はココロの事を表現していたりします。

ココロとカラダの違いは分かるけど、魂と霊とココロと精神はどう違うのか？どれだけの講師が明確に答えられるのでしょうか。

古くは、霊を担っているのは宗教でした。しかし現在では、今までの出来事や歴史的な背景もあいまって、「宗教」という言葉そのものに先入観や固定観念が付いてしまっています。宗教を熱心に取り組んでいる人を、『あの人は宗教にすがっているのだ。』などと揶揄（やゆ）したり、宗教イコール洗脳、宗教に頼る人は弱い人、のようなイメージさえあります。しかしおかしな話しです。わたし達は食事をしないと生きていけません、食べ物にすがっているなどとは表現しません。相当に偏ったイメージが付いてしまっているのです。

それでは、わたし達はどこで「霊」を学び、磨けば良いのでしょうか。基本的に研究会で言うところの「研究会マインド」などと表現しているものは、カラダでもココロでもない、霊のことを指して言っています。そして、本手引きも、他のカリキュラムでは扱わない「霊」を中心テーマとして置き、総合的に研鑽しています。

さて、それでは、霊とは一体何か。端的に記載いたします。

ココロは、あくまで自分の事です。この範囲を超えません。しかし、霊は自分という範囲を超えるものです。自分の範囲内ならココロ、自分という範囲を超えるならそれは『霊』であると定義します。表現の仕方はいくらでもありますし、難しく表現しようと思ったら

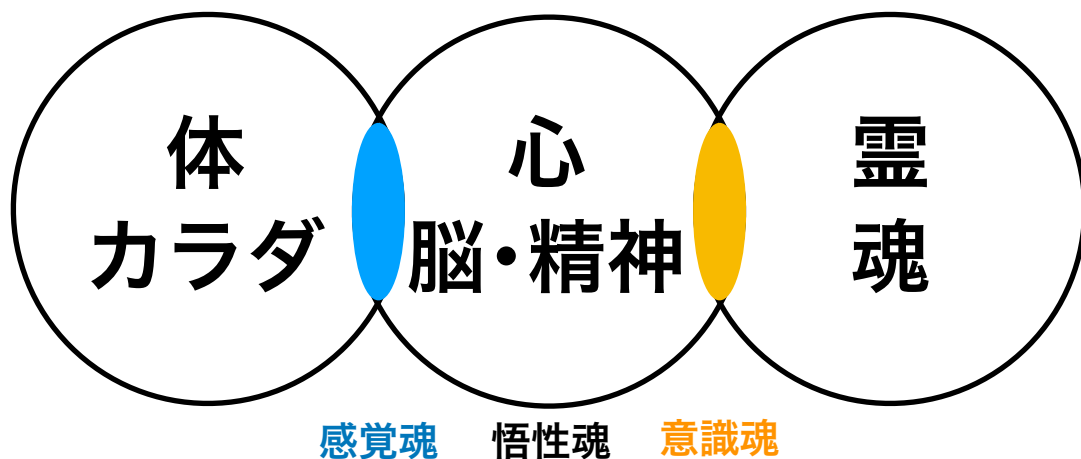
## 脳大成理論 1-30

いくらでもできますが、ここで示す定義が極めて現実的であり、理解しやすい表現ではないでしょうか。

好き嫌いや、合う合わない、はあくまで自分の範囲内です。ゆえにそれはココロの範囲です。あなたがあなたの為に何かをやるなら、それもココロの範囲です。

例えば誰かにあなたが力添えしたとします。しかし、その相手はあなたに感謝の意を示しません。ですが、良い方向に向かいました。その時に、その相手を喜んであげられたとするなら、それは「靈性」です。なぜなら自分という範囲を超えているからです。あなたが認められなかったとしてもあなたがそれを認め、喜べるならそれは「靈性」と言えるでしょう。あなたの好き嫌いや納得行く行かないを超えて評価できたなら「靈性」です。

つまりあなたが自分の見返りではない自分を超えた誰かのために何かをやるならそれは「靈性」です。それを脳大成理論では、『志に生きる』というあり方で表現しています。



シュタイナーの言う感覚魂、悟性魂、意識魂は、それぞれ上記の位置づけであると言える。

それぞれ、カラダにはカラダの原理があり、ココロにはココロの原理があり、霊には霊の原理があります。そして、相違する原理をつなぐためのインターフェイスが存在するのです。

現在は前述の通り、ココロとカラダが人を創っているという考え方が大半であり、靈性という視点がありません。であれば、日々の暮らしの中で意識することはないでしょう。それが靈性とココロのインターフェイスを閉じさせている原因であり、それがなんとも言えないココロの乾きを作っているのです。若い世代の無気力感や自殺の増加もここから来ているのではないかと考えられます。よって、靈性を磨くために、社会性を基盤に、道徳という表現を持って脳科学を軸として脳大成理論を構築する。それが1,000年先の未来の子ども達が靈性を学び、磨くための軸となる考えとなる。それが本手引きを作成する目的であり、志です。靈性という言葉を使わずとも、意味さえ理解できれば、いくらでも伝えることは可能です。もちろん、共有が重要であるという事も靈性から見た考え方です。そして、フェイクから本物さへとあり方を磨いていく事も靈性という視点から見た考えです。靈性という視点を日々の暮らしにしっかりと据えて、本物さを磨いて参りましょう。